

^ 13
3584
2



13
3584
2



本
傳
卷
二

早稲田 大学 図書館
35.2.2
蔵書



雙峽蝶白糸冊子第二帙



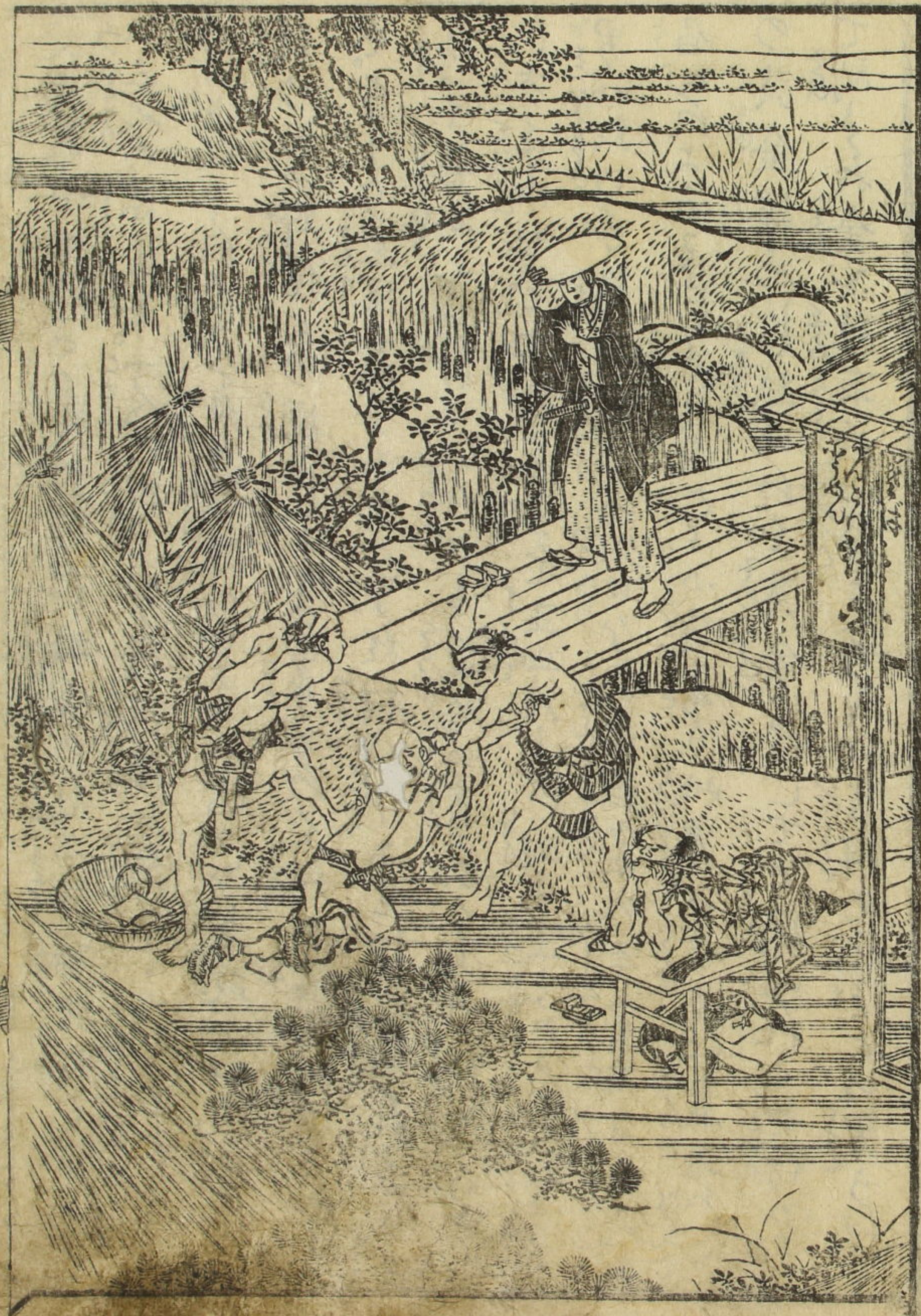
○ 免絲の巻

東都 芍藥亭主人著

少れ文女ありて性質の偏らふより尚古の癖を醸して書画の
いづれも更なる。如との錢半れ尾も數百載の物とさへいへば
の金沢不吝贖たれむとみ賤半とて是が為おらしむひきり
書齋おとより居る所藏の他買とえりぐじて多らう。金實
お古とりしごも散のさうやうなれおれりれむ千載の後おれり
奇とさるお不足。晋唐の法帖。紙書。摹。搨。神。存。お
ごも多の人を徑る画。餅。飢。を。不。政。白。玉。國。名。公。の。墨。痕。在。東

諸賢の丹書具眼の者おのづかれを誰う真仮と識ん鐘銘研
のあつた真ふ可貴して摸本の得易こそ遺憾なれ盛余の
書残飲の尾半れ鏡を抱えて未遇良人玉の替と得て空く
懐蓬萊たぐひなれよ。又想よ人ふ誇せむ術の能ありて身は
護災の徳の徳なれ。皇國の刀劍に世界の冠はるる論は
上古の製神庫佛刹を藏そのを姑舎和州の天國天座奥州
の舞草及伯州の安綱がふたれ八百年の今にいらりて三尺お及
ぶれ長劍形全存氣斗牛の衝靈邪宗を禳めその得がたれ
りて永延より建武の前後あいらりて龜文濤の驚が如く。
漫理虹の發がぶく。また會玉と切良刀百と以かぞふをじ。
尚古の士刀劍を除て何と弄ぐんとて夫より一向は古刀と

愛し賊を擲く俄お索搜は。大宝の藤戸。天長の真守承平の
安房。永延の宗近寛弘の行平など多く聚りて公卿れ什代
なと由緒にしうおゆれもあれと信疑半がれおそくなかどそ
いうて相劍の術を得て真仮をころしん刀莖お銘を鑄とれえ
おぼつらなれ。はして上工銘と不鑄も多しと聞われを残價と以
たふとれ劍得るゆかこうれよ。其頃京城あま五條高長卿の
身萱原何某か未裔足利家よ仕こつ刀劍れ賞金と並業
とそれの外宇都宮氏一派ありて世よ行つれれど畿内を獲
仁より以降打はれと戦國の術とありて往來不容易ハ千金
の劍や一脚の夫お委と鑿定て請ふよはなれ。あまりにおめひ
ふく古文書のうらに搜得とこりやあれと書肆肉董舗など



とるよあまの
標除兵衛
旅傍の難を救て
福とひく

えぬれと。日まご高うりうは城壇の社お詣。帰踏町とづれふて
二三人の悪少幸一人の機りかかぬ行僧を捕へ衣をも剥とらん
ありさばなれを。こゝれは不堪つとよりていつたれ故よかと尋
傍のり野僧との國にじりての事なれを所の名もありさうら
ど。さよりと里むかりあるさなれ村の中あもいと大なる家よま
寄く赤料を請けけに。今日と追福の事ありとて飯をあらへ
孔方の中など布施して。さてま出んと世耐よ。主とへええん運と
男一封の手簡に。城下の入口なれ沽酒家の主貫太さふ人お
届られよとこじしををこふ持来り。此男お届りに裏あの一色
の黄金添のよし誌めれを其金としてと聞ゆれど。世傍など
て副とれ金と掠取人。此ゆさばぐに言解ゆれどこの男うけが

とど。踏費は余波なくふへわれと程負とのとどとて衣まぐ
奪んとひかり。さうらの踏費をうしなひ。又衣をも奪れまじふ。
何とりて此末の呉場を拜して志願やまじさうらんと。辞とら
されらうらうと貫太声あらうふ。これを此傍おかすあひありて取
さうらうらなり。踏人の関とれるゆへあがれるし疾まりね。従来
此傍金あつて不まをいごこお訟すゆへも明白なれへ。正
かぬ行ひめれはこそ自の踏費を出して一向お謝つら。又陀使の
裏より。犢鼻褌のとげとすてあるぐりりとり。無と支黨の者
おとやうとしたれなんと。いひて衣をさかなぐり帯ひと解を
と。兵衛太とに此まで。此沽酒家と我が家お仕くる者も。原表
貫太と不名告。又他の二人此のうらふんをたづね男なり。さうら

汝等黨を以て行客をなやみて拐兒をなす。先を得ては
行傍の路費を返さばえゆること。さもなれば捕て訟へん
行僧貫本を放したまふなるといひて。他の二人を捕人とする
次。悪少年等此言を父やいな行傍を突倒し足をやみ逃
去ね。兵衛追ふとも捕得ざらん。ゆゑにかり行傍おひりて旅
馴るるね。再やおひりけねるゆゑて神を勞しむひまん。いど僕
が家よりあつて休むひも人路費はよれふとてかひまんとして
伴ひ帰て浴をせ飯をゆめ夜をもにそのかたれお言書画
及び刀劍のりお歩て議論不允一度と将一度は歡び。明日
早且起出く。書を承和帝。藤原関雄が草書紀夏井石上
宅嗣が草隸空海の飛白逸勢の八分弘仁帝の法華経中

書王の菟裘の賦。菅右相の長谷寺縁起。紀播守の贈蕃客
詩草。道風の七徳帖。敏行の一切経博覧。橘氏文集。佐理の
海陽泉帖。公任辞宦表。隆綱陣定文。亞相行成樂府の要
文。次書くは扇。固防内侍垣衣の和歌。次題くは柱。公主
伊都山階寺。奉し御願文。納言定家信實が女ふよる
古今集。元應帝加茂氏女を挑。宸翰。橘直幹。民部太輔
を請上書。大江匡範の七言律詩。俊頼朝臣の世番歌。人に
大二条殿の月字。小式部内侍がと字添。懷帝範。永朝臣
の詠歌。小大納言公任の裏書。為くは短籍。相國忠通。基衡
と惡て棄返くは寺勝。河内重如上。臈を惡て自贈くは艶
書。北邊左大臣の春鶯囀の筆譜。世尊寺伊經の行書の琵琶

の引。康頼が流世。塔婆。慶運が埋に。家集。伯度が草草。蔡。雲
が飛白。鍾。繇が鸞。戲海。義之。龍。跳天。呂尚が游。絲。張。旭が雲
煙。歐陽詢が鉄。畫。顔魯公が銀。鈎。懷素が驚。蛇。出草。輩。光が飛
鳥。出林。李時雍が跨。螭の大字。宋元章が蠅。頭の小。楷。鄭。慶
が三。絶。韋。陟が五。雲。晋の二。妙。宋の四。家。すべて。真。蹟。して。石
本。録。書。以。不。收。重。々。金。剛。が。九。五。層。の。山。行。忠。り。十六。羅。漢。公。望
が。松。成。光。が。鷄。惠。心。の。十。界。榮。賀。が。三。尊。良。秀。が。不。動。大。藏。の
大。黒。為。久。が。觀。音。一。之。が。文。珠。弘。高。が。地。獄。の。屏。風。明。兆。が。涅
槃。の。大。幅。負。信。公。の。子。規。の。扇。土。佐。局。の。名。勝。帖。巨。勢。相。覽
が。竹。取。翁。藤。原。高。子。が。光。源。氏。守。貞。親。王。の。袂。衣。平。相。國。女
の。勢。語。正。子。内。親。王。画。合。の。冊。子。飛。鳥。部。常。則。が。須。磨。の。画。帖。

惟久が奥羽軍記。邦道が兼隆の誼。兼加茂祭の行列。
仲氏が法觀寺の緑起。百濟河成が琴。紙。子。画。之。飛。童。の。羽。僧。正
が。旋。風。小。飄。之。依。忠。季。が。女。不。贈。之。雪。景。信。實。が。人。不。与
た。る。肖。像。黄。荃。が。鶴。徽。宗。の。鷹。包。鼎。が。虎。戴。嵩。の。牛。滕。王。が
蝶。安。仁。が。奥。顧。光。宝。が。獅。易。元。吉。が。猿。道。子。が。五。龍。寧。王。が。六
馬。牧。溪。が。達。磨。周。昉。が。美。人。換。漢。臣。が。嬰。兒。顧。愷。之。が。隣。女。
馮。大。有。が。荷。湯。正。中。が。蘭。王。立。本。が。牡丹。傍。子。温。が。蒲。萄。耶。悉。が
寒。林。夏。珪。が。雪。景。僧。惠。宗。が。花。雁。李。安。忠。が。走。獸。錢。選。が。青。綠。の
山。龍。眠。が。白。猫。の。佛。王。摩。詰。が。雪。中。の。芭。蕉。陳。清。波。が。湖。上。の。金。景
圖。立。本。が。十八。學。士。顏。秋。月。が。十六。羅。漢。韓。幹。曹。霸。が。鞍。馬。梁
楷。王。羲。之。が。道。叙。東。坡。蕭。悦。が。竹。張。藻。廉。布。が。松。邊。鸞。馬。遠。の

花も。趙昌陳珩の草虫絹布の如き徐熙の花木人豆の如き
李迪の小景。数尺の絲。或郭忠恕の紙。或一朶の雲と呼ぶ。或
僧繇が画龍。對心涼風。或生とれ。李成が驟雨。霖々水声と聞
思訓が山水。悉諸家の長とれ。旭茶碗と井戸。熊川。曆。花
之島。繪高麗。割高臺。雜乱面。茶入。大海。飄箏。茄子。常陸帶。
搦藻髮。芋之子。餓鬼腹。釜。天命。芦屋。香炉。雲鶴。二警
花箱。香合。美壺。風炉の類。奉てかぞへ。其れ。其他古尾。古硯。
樂器。織物。和漢の數種。とり出て。行傍。或々賞鑒。さすれり。
十はして一を不外。言中。ちり。刀劔。いりて。へ冷笑。ひく可。否を
不言。強て。同。不。お。よ。んで。や。う。く。唇。と。動。して。り。皇。國。の。劔。異。國。小
勝。と。あ。へ。い。り。も。でも。あ。ら。び。されど。書。画。古。器。と。さ。も。一。刀。劔。の。價

俄ふあがり。これ故と。知。り。ぬ。や。兵。藏。り。未。聞。行。傍。い。り。北。条。氏
權。が。弄。て。人。心。の。疎。と。て。これ。時。小。乗。て。後。醍。醐。帝。兵。次。等
み。ひ。義。貞。正。成。の。功。勲。お。よ。り。て。重。て。祿。を。踐。帝。自。政。と。り
と。し。ひ。四。海。再。王。家。み。あ。ご。ひ。奉。り。し。う。准。后。の。色。は。荒。談
臣。の。言。と。信。し。賄。賂。方。に。行。り。れ。賞。罰。不。當。武。夫。と。り。その。み
皆。眉。が。め。り。め。額。と。り。せて。竊。り。北。条。氏。の。政。を。慕。ひ。帝。次
ら。し。み。奉。り。れ。機。を。見。て。尊。氏。卿。帝。に。叛。光。明。帝。次。と。朝
敵。の。名。次。の。が。れ。二。帝。南。北。は。割。據。め。ひ。互。あ。反。と。さ。り。降。り
賞。と。足。利。氏。の。家。を。興。せ。れ。後。醍。醐。帝。功。を。賞。し。ま。り。あ。ら。は
な。れ。お。反。し。功。小。も。地。と。さ。り。の。丈。ろ。り。や。り。て。人。心。を。離。れ
たり。その。な。れ。ば。義。滿。公。の。時。い。り。て。功。あ。れ。ば。も。あ。ら。は。る。と。地

官位皆先規お超へ進べし。これに於て書画古器刀
劍を千金お直ぐ手自賜ひしより。海内お一幅と誇。天下お
一々と銜莊園を賜ひしより。も遙おそれれ美目となり
て。必用お完しれ一時の權謀お出れとくども。今後價お不減
不朽の銀會おして。經濟の奇貨にあらざや。兵藏り師乃
賞鑒書画おすこやうおして刀劍おとゆたひありけり。行傍
書画と筆法と風韻ととて其人を識紙帛と設色は
とて其代を論仮の真お逼われども。自毫を採て摸字お至
て。玉石のころをじ。刀劍と巧拙又文お灼然風土鉄色お彰
とくとも。磨研磨るるは錦お細。鉄鏽多なれは月雲お
隠が如し。且鍛冶一塊の鉄は若干の神を費し。長短度お叶

輕重とくお應じ火お投じ水お投し水火激時巧を造化は委
故一人の手に成るものも十枚の劍皆一般なれ。其一般なれ
ざれその外軌範として一般あらざれ数千の刀劍は是と云え
とて書画の贋小易けは又其仮を知も易し。刀劍を贋お
難るれは又其仮を知も難し。正法一尺高きれば魔一丈高し。野
傍赤心おおごちなり。これ知りて真仮を論じ。兵藏り真
仮の喻し。事か。其利鈍を亦し。人行傍り。劍の徳と
劍の用あり。妖と穢ひ邪を駈て。終身用れり。形し。人
服するは劍の徒なり。骨と截甲を割連日戦て不寧。不毀の
劍の用なり。又文の美を愛て利鈍お不拘。劍の用を失ひ
截断の利を慕て巧拙お不拘。劍の徒。小戾を。劍の物の

切れをりて足るりといふと深おもりぞれの論なる。巧形
いうでう其のり人其のりいづく身と護ふ足ん兵藏の巧
はしそ利そのと拙して鈍そのとの舎て不論拙して利その
巧み志そ鈍そのふまそらん。さうば新刀も又弁べうぞ徳
を佩る人母よれあるべし。行傍り古刀の利と新刀の利と同
ありひまめや。古刀を保元平治以来今小いりて数百年の間
戦國を経て形全存そのの及と試事百りてかぞふは今村
刀肉試そのま三度よ不過そのと日と同一て語べたふあ
と。嗟鑄劍の業大なれ哉千載と経く尚用ふ堪たり。況と
四百年の物意みまうせそ佩ふとりかふん其父遠ふけふ
れを懐ふ今鍛て今之用小あつれその形んや。古の刀劍用る

小不堪耐みいりて今之刀劍始て用れ處あへし。新刀が
命れ人自佩る事不為してこれを子孫へ傳へ新刀を
鍛者今の人れ為小不造してとそ後世に遺さんとの志
あらば皇國の良劍天地とともれ後るひからんを今教
百年の後小生そ。利鈍鉄質とて数百年前の刀劍小
むとしからんを。今より数百年の後古刀用小不堪耐み
いりて今之新刀これ先ごらて用ふ堪ざらん其後
の為小敷とそ終なり。兵荒とにいりて行傍の論れ
服し。古劍を愛れ念志よりしして鑿刀の措持は
不休。行僧黙止かそやありちん大休説示しきり。日
暇が告くま出んとそれが兵藏あまがらにとりて五日

そぐらうらに此偽冒風のうらとてかりそめふ打倒けれが
日不そひて病おりのいとあふりしを名あれた一医主どり
價貴と薬をももまばりしは月ととえて病全愈の
家ふとせりりもつたえあもあふん。今の暇あつたんとこの
不どの恩惠深うりしかじけなきおど。こまやうにささめふ
兵藏も今もささめふせんうさおく踏費の日外のとりなく
奪とまひしり。世にとてあふあもこれなうてささめ一
封の銀が賄りしをを行傍おしうがれて封お一切小半を
収てのとりは兵藏お返し。立別とんとせしがまよりと。緒
包のうらよりひとりの四五すむかりれ箱の塵地お沢蟹が
描とれを取出し。これの飛傍あふ副と携ものなれど病

後氣力いまご本に復らど。かむりれ運も携おふつづし。
衝石の園く巡てゆらんまてあづかまで多といふは兵藏とら
せとらけびとらうとらめ。道二里がほどえおらうと帰路お
まかあらびと契て袂あうら右と左へまうれ行ぬ。兵藏と
家おゆり此やど行傍が論し。あどもおひめづらとに鑿刀
の術俄おとみとれとらして公ひそくにう海とびいお。あや
おく此五六日の刀劔携ある人もなくてむらじく日とて
おらうとら。

○ 澤蟹の巻

游絲の影消と糸水やそやうに簷お懸り。風筆の声絶
雁不のう小橋おおとらふ。春雨いとあめやうに岸けがれて柳小

耳に添へ流の唇濡らんと云々書多しひうげ友も
かまといよりごらすれ付しも兵藏主とおととかと通家の人
とてありいもなぐ橋上ふのぢりふれへ萩原庸介なるもの
二がれ詫客なれば兵藏よろこびて酒などとも何れも諸
かゝる詞のよしに庸介が此十日ほどあに都より下され人あり
卜筮の神託して往時のふ跡を指前路の禍福を説きその
かどらるる匣の裏に藏されそのやうに莖に露とぐらるるまじ
篋中が指のたがふがれをりて後来のふゆを説き信じて居る卿も
一夕招き拳家の禍福を豫記おきて福のふれを不馮禍
の兆に慎むやうに又家とらるのあはれの一術をうらやと云ふ兵藏
いひしして易を伏羲文王周公孔子四聖人のまになりて天地

小参萬象の包造化の機を泄し人智の窮を依く古人大疑
は當らざれを不筮とこれに重ざればなり幸小呂政書と林火の
元を免とぞも京房日に排の術小贖とてより婦女の弄抄となり
ね台トの本前小知んるを欲而を卦影とるゆ后小驗あり何
ぞ同ふ足んと宋の王氏がいひまん如く後来の事多たがへり
於往則順而知之於来則逆而數之と韓康伯といひかど
卦が布て吉凶を測る猶曆を作て周年の氣候が定れがごと
天地と人とのま活物なり一彈指の間小變化するまははは大暑
却て涼しく大寒却て暖ふ十月雨なく二月雪あり定まれ
禍福ありとも行ひの善悪よりて地を易がらんや又筮中
の抄とにして中が神なりとすれどその他が筮を不待蓋を用を

小兒も知る。益なるとして人を惑し、賊を費させ、刀王とする。竿政おのげれとらひと同く人のりてあそびそのと為る。又營生の一術なり。これ大為者となれべし。これをえられ者とする。小竹うらぬかるが。小伎といへども公と用る。あつちれが神あ入れをえまふべしとす。むらに妻の阿袖兒の幸藏も出まり。えまふしといふ。さうばとて人走らすとて伴ひする。年紀四十むかりの男色。哲く丈高く。やしかなぬひとが。ふ兵衛も公あつち易の大音あれこれ同ひ試み。應對流あつちが。し。拳家の吉凶と不同。先画ふ。その入とて其名状と同。算と投卦を布ていふ。とらぬひととしてたがふ。なし。一座目。

見合してその術の精密。伏しけり。兵藏ありあふ。他の術ありてこれを藏す。公はかかり知りてかく。いひあはれん。此座の人とて不知。我もあつちぬ。そのをうらむ。ほせ。其術は折じ。夫おとを上げれ。その形れとて。彼行傍があつち置。置。画と出。て是をと請ふ。彼男あつち。考算本。あつち。此裏一卷の書あり。兵衛いふ。何を記せられ書なり。や彼男いふ。経史。小非丹書。小非貝葉。小非抄。と指揮の象ありて。殺伐の氣と兼り。相徑と兵書とが。兵衛いふ。此画。とて。我と。いれ。とらぬ。な。彼裏。い。う。な。れ。物。あり。や。僕も。あ。ら。ど。人の。あ。つ。ち。な。れ。その。み。づ。り。に。用。ん。も。公。な。ら。ぬ。あ。つ。ち。ご。み。づ。れ。も。さ。ら。に。い。う。り。て。勢。ひ。う。ら。む。な。事。あ。つ。ち。と。て。あ。つ。ち。り。て。



小者
 裏の
 兵衛相
 藏の
 書と得る

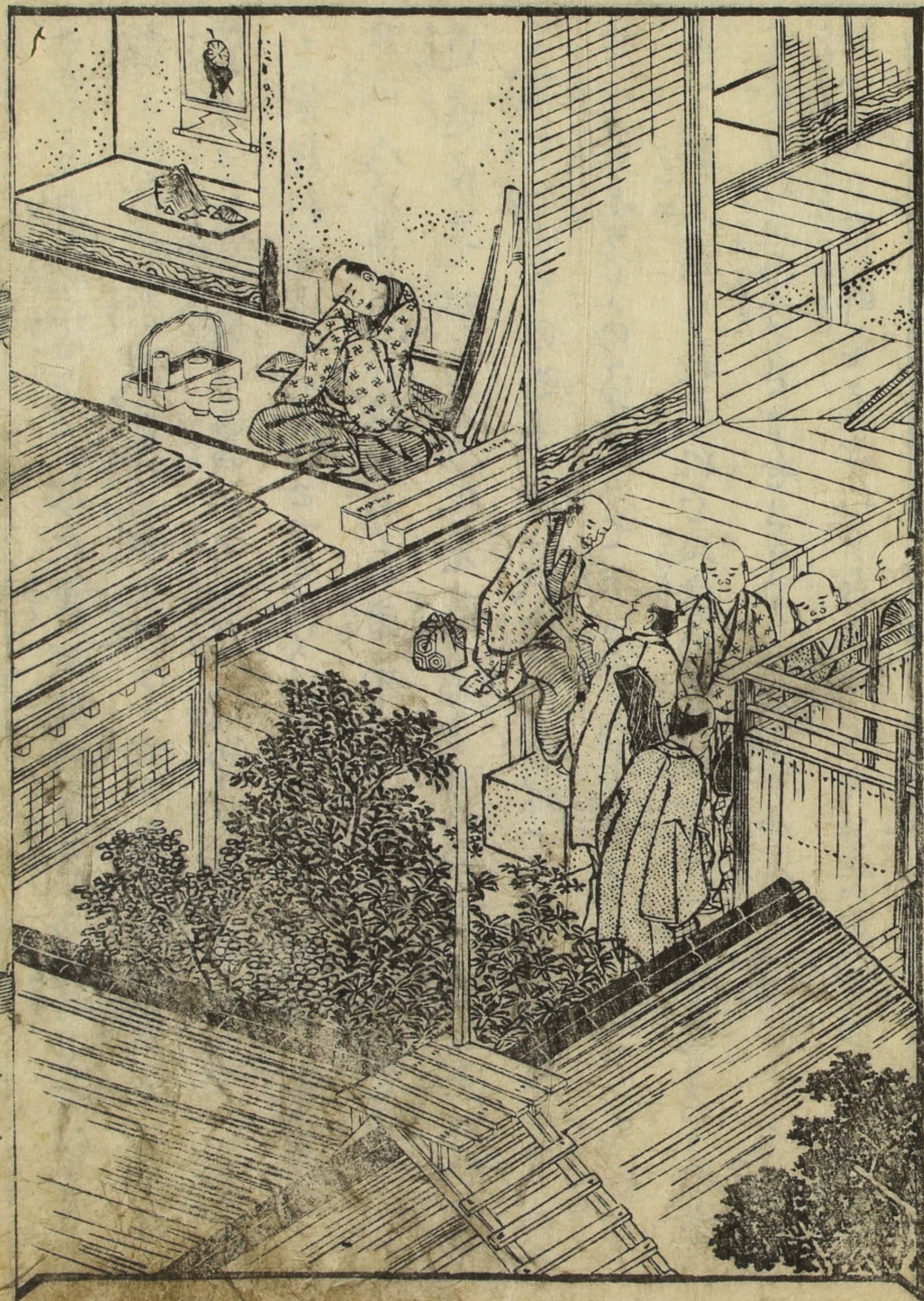


さほぐすれどひくくざれ透間は。彼男又一卦と布て此
の機園蟹の眼小のれぼじとらふ。公をさめてくれれば
にじし生とれ蟹の眼金銅をりてはくはれなり。小箱の爪小
ておとせば眼ゆるだ生ぬ。双眼とめれば去とば画おのづからひくはる
裏丹のいひにたがもと一軸の書とこめり。標題小徹天祖
徑とあはしてとて刀劔賞鑿の軌範以戴して。兵藏手早
く巻とめて彼男が術の精妙小感多の謝おのづからへく
帰しちり。兵藏おのひくはる行傍我恩と報んとおのづから
此書一人小傳ある提ひれを私小授あるりあさる。我おひそ
おんれをゆりせふふとそと。夜と日おつだて写しと。原奉ハ
のとの如くともめおれ。我刀劔を好の志あつたおよりて天とれを

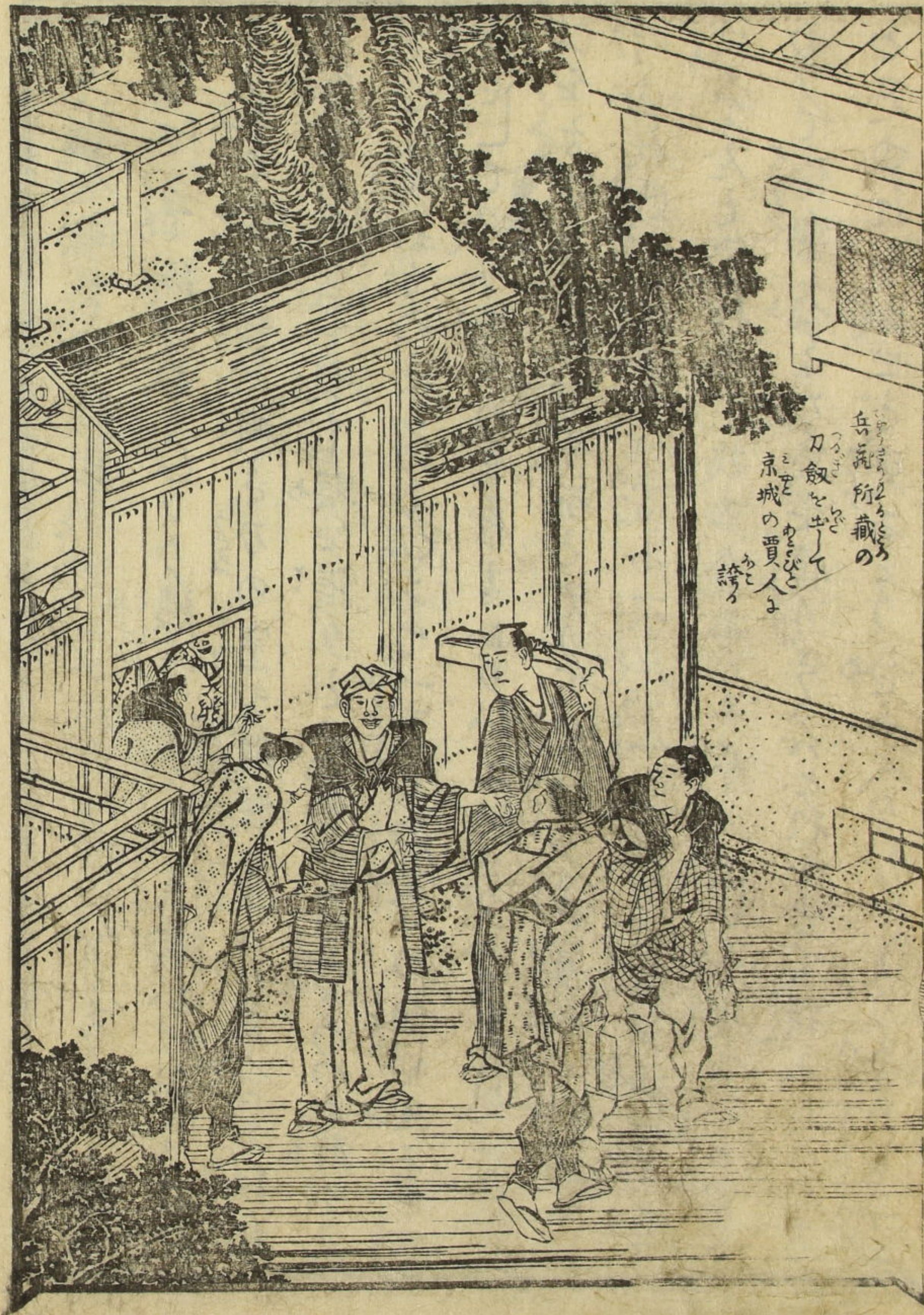
賜あつりとしてよほさるるおやかならば。これよりのちの彼書と
暗小記とれすて家小をさめし刀劔おんれお軌範お合はれば
價物ぞとて售代はし新お名劔をあつめんとそ。けりてや
世おつえそ他の國よりも携會ひく。黄泉の字画なりとそ
劔の山をほりちり。兵藏と彼書お載軌範おあつた。彼
おれし巧拙をこらる。稀筥をりて濯へお髪を梳がれお
おれとれ思ひ傾よとけ。老馬と得て迷へる路お行がぶとく
うさかふお公術おれぬ價賤くしと。佐貴きを得おふとそ
そとて数お貫目の賤皆散し。茶具書画おはく刀劔
かんとよなれとゆひと。志多お。賤おれが為しとて交
とべたものも残しとすくふなりてより。日おの幾度り往

せれ多の刀買さもあつふあつふ来れを使を駈くいうこと
同まれば皆家と空蟬の蛻れ衣となりて衣ひとつぶあつた
と笑てうつりしかりぬ人表ながく公あかす。皆く家再在る
と好貨物のありて打連ぞらて行しあやと。さづくら往てあり
の人お同ひとらむれを妻子推かされものもさべて家よ不在
といふもぞ。公の中ひつうらすだぬ。二三月のち都下より。山に
の繁花があつひ。一夥の客商ども下りたり。彼等わろ高買
と遠ひ。茶器書画刀劔の鑑定まわす。その者おあつびと笑
て。兵衛彼買人等に誇んとて。あは日まひれ會て賞賚金
請ふ。各商相ふあはし。これあても山口の繁昌と知られり。と耳語
よと眼をさまし。これあても山口の繁昌と知られり。と耳語

あつた夫聞く。時兵衛が心いうむかりう世じかりちんく。譲り
らひて。尋紙のあつひより濃紫。浅葱黄葉あつひ。の肥
とり出く。袋の紐が解と。刀の室を脱懐帛はよ合と紙格
次脊あて。息を凝し。眼を張り。と見。うら見。眉をあつら。顔を見
かして。再おとらじけをひめて。一言も毀譽の辞と出さ。半
見にして。あつりきりぬ。兵衛とあつひ。にさうひて。さああやし
ひをさる。又一年やどありて。米油と多買入。利あつた。
貯。れ賤。其。換。失。お。當。お。不。足。と。四。口。の。刀。劔。出。し。る。售。
代。ま。き。んと。す。れ。お。十。枚。の。金。あ。ご。母。子。人。は。し。千。里。の。駒。へ。常。お
ありて。伯樂をよなれを憤り。さづぶとれをとて持おさる。あ
と見あれを出せど。更おとら合ふ人あつじより。今ハ疑年五



二
夫



兵衛所蔵の
刀剣を
京城の買人
と
誇る

二
帳

まどく。日前ひまへ写やとりたれ書かき父ちち兒この幸あはれ養やしなふ携たづなせせしそふ
都みやこ本もとの不ふせ。累かさね代しろ足あし利り家け仕つかせよ世よ小せう鑒かん定ていの家けといふ
菅原すがわら氏うぢ某たがひ就つく書かきの可よ否ひと同おなく
家け説せつ外げ洩ひがじとてらけが色いろなけりし家けは假かりまふ事こと
父ちち同おな人ひとと申まをす父ちちがれ者ものあまの刀やいばと藏くらふ人ひとと
道みち遠とほくして携たづなのりてえせまわせんゆ容易やすふあふはより
て其その刀やいば劔けんものあまはし父ちち書かきはる保たもてとおひさぶふふ
幸あはれ此この書かきあふぐのりありて不おろ慮しうし置おくれあて。これを軌てん範はん
として贖あ入いとくれなれむ此この書かきの去い後ごとどに喻たとへたるがのぞこ
を足たりぬ此この望のぞみとさせよまよはぬの家けも帰かへるがじとく。懇かん小せう
詰つ問もんて日ひ夜や郵ゆうをとかなれがふあふくめてあつらひ保たもて。他た餉くわん

父ちち懐なつ小せうして衣え通とほ媛ひめも使つかせし中ちゆう臣しん烏う賊ぞく津つも似にれ武ぶと
て其その一ひと二ふたを説せつ知ちらせ。此この書かき全ぜん篇ぺん妄まが説せつ也なりして軌てん範はんひつらして
合あはれはししむれに幸あはれ飛とも力ちからなく立た帰かへてふ状あは詳しょうお語かたづ
らるに。兵へい養やしならるにいつてこじりて行い僧そう卜うら者もの刀やいば賈かの類るい皆みな是なり
一群ひとの拐くわい兒にかれを覺おぼえ家け日ひあそひて妻つまれおまごひて贖あ入い
せらる。あまれ彼あ支し黨とうの者ものお出い會あひし引ひとらへてうれめんせん
と藁わらとらひあまれ耐たえそめれ往い時じの行い傍ぼう入いるあぞ家けこころ
てのまうれりああまれまごひ引ひ捕とらへんとする者ものふなく類るい大おほ
まうり居いる。行い傍ぼうありしあかりぬ風かぜ情なさけあて。疎そ閑かんふすまじ
おらうりよまごひ家けはまごりり恩おんまごりりあしひき
その時ときあつらふ世よ画えと賜たまらんといふ。兵へい養やしな今いまの世よあま

四話をもなすべし此騙局めとして引居り彼画を預託候はくは
そへそのないとせそとて追ひまゝ市令の邸お伴ひ行と詰問を
詰て同伴といせんとす市令兵衛が詰つるところ成りもなき
けとあり行傍小對ひ此奉ありやと同様小にじり路上あり
攫客に會ひ路費を棄棄と兵衛よりあやうきを收めて兵衛が
家お投宿し病愈て後画とあづけて立世しすでの露をかきと
兵衛がいふところぬたぐひさうらうらと其後のさゆの世傍かめ
不圖奉なり野傍若其徒なりば遠く去るに何の益ありて
自再その家お尋りて囚お就べとそのうへ預けおとされ画のうら
なれい全相劔のりなど記せられ書ありあふに金泥の徑文深き
料小携しおてその耐いりまが写べた費用を喜捨人のあふげれ

よりのあづけおきになり此年月流紫が巡りて經文写をた料とこれ
如く聚りぬ此奉いりつらりとおぼしたまふ画の中あふらうらんと
いふ兵藏といふ憤お不堪今そおのど計較をあらけし得とせん
と画とりて打おた一軸の書を取り出して市令に呈し自廢
中より一帙のとりおとせし雙書と請ひ市令副本と下司お
讀せ自本書の紐を解て披とせぬ小一點の墨痕とふし兵藏
お投返し声あらうらにゆられ兵衛汝に罪ありて自不覺や身高買
として不用の刀劔を聚む一の罪なり他人お物を預りて主お不告し
てさうりにこれをひらく二の罪あり根なし言お訟て人と誣吏
とらうらんとこの罪なり此癡人を不懲へ驕奢小長て吏と侮の
弊遂小國家の災と為さしとて家財を沒收兵藏父子郎内は



住るべき田舎を去りて行僧の所為の事なれば、其の言理の妙ふ似るれを罪のくさるべし。國境におく行きて再入る事とゆれさる。又卜者刀賈の容貌を記て領國おのりかちかりて捕しむ。兵藏人の欺と受て賤とらしむ。地を追きてかきまじれ憤あひびか。病發してやどなく死す。妻の阿袖もはたてて鬼簿お入りぬ。幸菰が名もおりぬ。壽命を聞人のつとまざれまなかりしとぞ。

○おりの彼行僧再兵藏が家お尋ね其の秘測がじ。兵藏狐疑よつり市令明察るべはいつか。お尋ねるを爲んも不可知とてその跡とりて論が疑しる多し。行僧とじぬ茶具書画と賞鑒たぐざりしハ兼く兵藏が

家お藏かざり搜り知りてつくれまふん。巻軸の白紙と成ある。訪ひすれお同じ画以造り。白紙の巻軸をさる。兵藏が家お尋ねのびりしとて久しむ。又墨と和のれそのありてやど經て文字の消失しあや。生焰消と朱砂は胡粉の下に塗り。酒と供とハ画像を酔し。鏡裏墨と燕脂と佳墨と抹和て腫と點ざれば光明を放し。墨と電の尿猿の膽と和て書ハ字深く石入り。膠小雌黄硝砂を拌て画を像幽小鏡よとぐすれ類はくの術ありてせむ惑と徒とくおうらむ。此巻を草せる時ハ偶録倉建長もの岡山大覚禪師及陸の傳と讀し。道陸と宋朝西蜀の人皇國お尋ね。都入りて泉涌寺の来迎院小寓り。又

鎌倉小下北条時頼を問ひ徳と慕ひて。禪苑へ携へ請て一世とて弘安元年七月廿四日偈と書て寂る。のち人の夢小入りて。宋朝より携来ありし鏡よ自の像とさひと告ぐ。其鏡をたれど幽は觀世音の像ありふ似たり。北条氏疑ひし磨るるに於て。くじりて幽隠ありし磨る小まごがひて觀世音の像鮮明よあり。小条氏深く悔謝と記せり。又華ひけずれ世とて北条氏鎌倉の執權としてかどりれり。を覺ざりしとてうそをけれ。時頼と龜山天皇弘長三年小卒ぬ。道隆が寂ハ弘安元年。以て將軍ハ惟康親王執權と小条時宗なり。乃隆ちの者死後ハ斯はと術とのにして千載の笑ひとす。

ぞとにあらん其徒小条氏の好く道隆とくふとびし。母よりて遺せれ鏡。佛像と画。爰は托く靈異をり。此鏡は画を青竹を炭火ふかけてあり。竹より出され。歴皂莢と煎じとれ。汁を洗ひ油氣を去て焼し。髮の灰。龜の尿と蟾の酥とを練りあせ。これを用ひしかな。此一条の事。此書は周の筆と筆とてこふとしぬ。

此鏡の方とてありし年
 湯洗ぬおぬいりし年

雙鯨蝶白糸冊子第二帙 甲



海東中
内
信

此
信
乃
便
於
東
京

以
此
信
乃
平
安

一
切
希
望

入
信

信
乃
平
安

信
乃
平
安

信
乃
平
安

